Title	平先生の思い出：ご家庭における平先生
Sub Title	
Author	西川, 理恵子(Nishikawa, Rieko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2012
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.85, No.12 (2012. 12) ,p.171- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事：平良先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20121228-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

先生とお別れすることになってしまったことは、今と
なつては返す返すも残念でたまりません。

名誉教授 森 征 一

平先生の思い出

——ご家庭における平先生——

夏休みと、お正月、ゼミ生は大挙して、平先生のお宅に何うのが慣例であった。先生は、お宅をお建てになつたとき、それを予定して、一番日当たりのよい居間に作り付けのベンチを用意なさつたと言う。ご家族にとっては、さぞや大変なことであつただろうと思うが、時に、二〇人を超す学生が、お宅の居間を占領することとなつた。その大量の学生を、奥様は、おいしい手料理でもてなしてくださつた。懐かしい思い出である。

平先生が法学部で教鞭をとり始めた時期は今よりずっと、さまざまの意味で、緊密な人間関係が存在していたように思う。その時代の雰囲気や、教員の様子を先生のお嬢様が、ご家族の観点からお書きになつたものを、ここに、引用させていただく。

蝶ネクタイの秘密

私の父との原風景は、夕暮れのアナーバーの散歩で

ある。イワツバメの巢のある崖目指して父と手をつなぎ、どこまでも、どこまでも茜色の空の下を歩いていく。

フルブライト奨学金を得て、父が氷川丸で海を渡りミシガン大学へ留学したのは一九五七年。母と一歳の私は、半年後プロペラ機を乗り継ぎシカゴまで行った。ホテルで寝付かれぬ私は、「おじちゃんお家に帰らないの?」と言い、最愛の妻と娘に再会した父を当惑させたと言う。そのころの父が猛勉強していたことは、後で知った。「簡単に結論を書くと、法律家は、理屈を重ねて答えを出さなければいけないと言われたんだ。」と教えてくれた。もともと父は、理屈っぽい人間ではなかったし、短気であったから、そういう論議には苦勞したのだろう。遠路はるばる、故手塚先生が見えて、彼地では猫の餌にしかない公魚で母がテンブラを作り、感激されたこともあった。

その後、グレイハウンドの長距離バスと大陸横断鉄道などで、西海岸に移り、カリフォルニアで生まれた弟と共に氷川丸で帰国したのが、一九五九年。今では考えられない旅と生活を、私たちは十分に楽しんだ。

日本でさらに、弟と妹が生まれ、総勢六人の大家族

となった。生来の子供好きの父には、喜びであったようである。

父は毎晩、自作の童話を語り、リクエストされた子守歌(歌は大好きで、いつも、大声で鼻歌を歌っていた。賛美歌から軍歌まで、レパートリーは広かった。)で子供を眠りにつかすほど子煩悩であったが、少々軍隊風なところもあり、出かける時は「出発進行」の号令がかかり、ぐずぐずしていると、「動作鈍重」と叱られた。夏休みにサングラス、アロハシャツ、ショートパンツ、サンダルの父が子供たちを従え、優雅な手製のドレスの母をしんがりに歌いながら行進していく様はちよつとした見ものだったに違いない。父が、行く先々で、その土地の面白い解説をし、質問に何でも答えてくれる「歩く辞書」であることを、私は当たり前だと思っていた。

日吉のグラウンドに、先生方の野球をみんで見に行つたこともある。それは、野球部のユニフォームを借りてやる、「本格的草野球」で、皆とても楽しそうだった。体育会バドミントン部の部長も、二五年務めたが、全然出来なかった。それでも、交流試合では、「羽根つき」を楽しんでいたが。

こういう父の生きる姿勢は、慶應に来る前に培われていた。

プロテスタントのクリスチャンであった父の教会との出会いは、阿佐ヶ谷東教会の幼稚園に通ったことに始まる。その後、小学校時代、祖父の仕事に伴い、天津、大連に住んだ。そこでは、家族で租界をめぐり、食歩歩き、多様な世界の存在と味を知った。

青山学院中等科へ補欠に入ったのは、体が弱かったせいらしい。陸軍経理学校へは、苦手な数学の問題集を丸暗記し、一五〇名中一三五番で合格した。ここで学んだ誇り高き不屈と我慢の精神は、最後まで父を支えた。

慶應へは、必ずしも第一志望で入学したわけではない。面接官に「早稲田のほうが家から近いから、合格したら早稲田に行きたい」と正直に話し、「面白いやつだから入れておこう」と、とってもらったと言う。

父は自分のことを、「補欠人生」と面白おかしく話し、こつこつ努力していることは言わなかった。それに、自分の価値観を私たちに強要する事もなく、各々の考えや、立場を尊重してくれた。そして、慶應の自由闊達で和気藹々とした雰囲気、父は愛した。だから

ら、「皆殺しの良」や、「CD法」は、父にとっては、一種の誇りであっただろうと思う。

気がついたら法律学科へ進学していた私は、白墨だらけの講義後の姿や、紫煙濛々たる研究室を垣間見た。ある夕、故田口精一先生と仲通を実に仲よさそうに歩いているのに遭遇した。田口先生に促されてやつと父は、私に気づいた。「何だ、おまえか。」内と外をきっちり分けている人だった。

トレードマークの蝶ネクタイは、たいていひん曲がっていた。おしゃれと言うより、楽だからと言う理由でしていたのだから仕方がない。

最期の床についてからは、覚悟をし、多くの人に会いたがった。お見舞いの方々には、苦しい中でも必ず気の聞いた一言と、「頑張れよ」の励ましの声をかけた。

最後の日、病室で妹たちが賛美歌を歌っていると、父の頬に一筋の涙が伝った。「男は泣いてはいけない」と言っていた父の最初で最期の涙だった。その夜、誰もいないところで父は、静かに八四年の生涯を終えた。

(小宮山優子記)

第二次大戦の末期、死を覚悟しながら出征し帰還した最後の世代である平先生は、お嬢様のお話からもわかるように、生きることに貪欲であり、熱心であったように思う。これは先生の世代に共通しているようだ。そして、だからこそ、平和を大事にし、学生にもそれを伝えることにも、強い情熱をお持ちだったのではないだろうか。

研究者としての平先生は、だから、好奇心が旺盛でいらして、英米法だけでなく、新しい展開をしだしたヨーロッパに注目なさって、EUI法研究の緒をお開きになったのだろう。どちらかと言うと、理論的に何かをつめていくというより、新しいことをどんどん追究していくタイプであったかと思う。まるで、少年のような目の輝きをお持ちであった。

そして、最期まで、ご家族と私たち学生を愛し、慈しみ、そして、新しい世界へ旅立っていかれたのである。残された私たちは、先生の世代が掲げたトーチを研究者としても教育者としても受け継ぎ、掲げていかなければならない。新しい世界を切り開いていった情熱も、学生に対する温かなかわり方も含めて。

法学部教授 西川 理恵子

平先生のご指導に感謝

とうとう平先生とお別れせねばならぬ時が来た。その寂しさを私はひしひしとかみしめている。

昭和五十四年、先生のゼミに入れていただいた時より、今日にいたるまで、慶應義塾の塾生としての在り方から始まり、現在の私があるのは平先生のご指導があったからこそである。先生と出会っていなければ、今の私はなにとあらためて感じている。

平先生との思い出は、走馬燈のように脳裏を駆け巡る蝶ネクタイでダンディーな慶應ボーイの先生とのゼミでの出会いは、衝撃的であった。自分も蝶ネクタイをしてみて、先生の真似をしたこともあったことを思い出す。アメリカに追いつけ追い越せの時代であったが、まだまだ法学については、大陸法の影響が強かったこともあり、アメリカ法の研究は遅れていた。その中でアメリカ法の研究をすることは、大きな夢を追うようなくわくした思いであった。平先生のゼミはアメリカのロー・スクー